

は し が き

言語センター長 鈴木将史

『言語センター広報』第22号をお届けします。本年度の小樽商大は2年ぶりに大学祭が催されるなど、かつての姿を取り戻しつつありますが、大学教育改革は着実に進めております。本学は現在、タブレットPCなどIT機器を駆使して教員と学生のより進化した相互交流型授業を可能にする「アクティブ・ラーニング (AL)」プロジェクトを、全国に先がけて推進している最中ですが、その結果、5号館の中小5教室はすべてAL教室となり、語学授業にも活用されております。

(当然これらの教室では3方がプロジェクタ付きホワイトボードとなり、クレヨンに似た筆記具「キットパス」による板書となりましたが、古き良き「黒板・チョーク」の使い勝手の良さを懐かしむ声もあります。学生側も、語学学習のIT化の象徴である「電子辞書」を利用する者が10数年前から飛躍的に増え、ひところは従来の辞書を完全に駆逐する勢いでしたが、最近はまだ紙の辞書が増えてきているような気がします。確かに語学学習用には、ある面で紙の辞書に一日の長があることも事実です。)ただ、それだけIT化を進めたところで、コミュニケーション能力の育成を目指す語学教育においては、授業の本質が人対人の構造にあることは今も昔も変わりはありません。その点において重要な要素のひとつは、授業のクラスサイズとなるのですが、2年間の2外国語選択必修を課す本学は、履修生の多さからクラスサイズが30名を大きくオーバーしてしまうことが常態となっています。また、2年目の学生は、1年目で履修した2外国語の一方を週2回授業の外国語ⅡA、他方を週1回授業の外国語ⅡBとして履修しなければなりません、各々の外国語でⅡA、ⅡBのクラスサイズが大きく異なってしまうという状況が近年目立つようになりました。こうした問題は、大学の非常勤講師予算にも深く係わっており、一朝一夕に解決できるものではありませんが、「北の外国語学校」との異名を取る本学全体の課題として、腰を据えて今後も取り組んでいきたいと考えております。

それでは本年度の言語センターの動向をご報告いたします。本年度も「外国人による集中外国語講座」を「英会話」(ジェイミー・ケンプ講師)、「中国語」(蘇林講師)、「ロシア語」(アレクサンドル・ポリーソヴィッチ・スペヴァコフスキー講師)、「韓国語」(宣憲洋講師)、についてそれぞれ10回(中国語・韓国語は前・後期10回ずつ)本学或いは小樽駅前サテライト「ゆめぽーと」で開講し、好評の内に日程を終了しました。また、昨年11月26日には、マーク・ホルスト教授/イブラヒム・ファロウク准教授により、「大学で英語を学んでみよう!小学生のためのActive English Camp!」が272AL教室において開催されました。12月1日には、「ベネズエラ音楽と文化〜ラテンリズムの脈〜」と題したレクチャー・コンサートが田林洋一准教授のご尽力のもと、言語センター主催で多目的ホールに於いて開催され、東京大学石橋純准教授率いる「エストゥディアンティーナ駒場」の演奏が披露されました。また、本学出身の中学・高校教員と本学教員が参加して英語教育・商業教育が研究・討論される第26回「教職研究会」が今年も2号館マルチメディアホール2を会場に12月14日に開催され、盛会裡に終了いたしました。人事としては、昨年4月、個別言語部門英語系井上典子准教授、同朝鮮語系李賢峻准教授、比較言語文化部門菅野優香准教授がそれぞれ着任されました。朝鮮語系は平成7年の選択必修科目「朝鮮語」開講以来、

初めて専任教員を配置できたこととなります。

それでは各教員の海外出張についてご報告いたします。

応用言語部門ショーン・クランキー教授は、第2回アメリカ・イギリス学会発表等のため、平成25年4月27日から5月15日まで東京大学、ウィーン経済大学等へ、10月23日から10月26日までは、学会発表（National Conference on Research in Teacher Education）のため、フィリピン大学へ出張されました。個別言語部門ロシア語系山田久就准教授は、協定校訪問及びアバール語、他の諸言語に関する資料収集のため、同年6月29日から7月6日まで、また8月8日から8月26日まで極東連邦大学（ウラジオストク）、サハリン国立大学（ユジノサハリンスク）国立図書館（モスクワ）他へ出張されました。比較言語文化部門菅野優香准教授は、第15回ソウル国際女性映画祭および女性映画祭ネットワーク国際会議への参加のため、同年5月24日から5月28日までArtreon（ソウル）、8月28日から9月8日までは、The 17th Thai short Film and Video Festivalへの参加等のため、バンコク芸術文化センター及びタイ国立フィルムアーカイブへ出張されました。個別言語部門フランス語系江口修教授は、アリアンス・フランセーズ発足130周年記念総会・講演会出席および研究資料の調査・収集のため、同年7月12日から7月22日までアリアンス・フランセーズ・パリ本部、フランス国立図書館へ出張されました。同部門中国語系裴崢教授は、外国語教授法等に関する調査、資料収集のため、同年8月14日から9月5日までスタンフォード大学及びマサチューセッツ工科大学へ出張されました。同部門英語系マーク・ホルスト教授は、英語教育に関する資料収集のため、同年9月2日から9月15日まで、ラオス国立大学へ出張されました。同ダニエラ・カルヤヌ教授は、学会発表等のため、Universite Saint-Louis（ブリュッセル）へ出張されました。同ジョン・サーマン教授は、資料収集・国際会議出席等のため、同年10月1日から平成26年1月6日まで、アメリカ（オクラホマ州）／カナダ（アルバータ州、バンフ市）へ出張されました。個別言語部門朝鮮語系李賢峻准教授は、「韓国日語日文学会冬季大会」出席等のため、平成25年12月20日から平成26年1月2日まで、韓国外国語大学等へ出張されました。

英語系は現在、授業にeラーニングによるセルフ・アクセス・スタディを導入して着実な成果を挙げていますが、対面授業との有機的な融合授業形態である「ブレンデッド・eラーニング」研究プロジェクトを立ち上げ、文科省からも高い評価を得ています。また、本年度からⅠの Semester 制を導入した英語以外の外国語系は、来年度からはⅡも Semester 制となります。これで本学外国語科目すべてが Semester 制となり、学生のより弾力的な科目履修が可能となることでしょう。

以上のように、本年度も言語センターの活動は旺盛なものでありました。来年度もセンターは、北海道の外国語・外国文化教育の一拠点として精力的に活動していく所存ですので、ご協力・ご支援の程、よろしくお願い申し上げます。